

聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

神が示されたすべてを受け取ったマリアは天に上げられた



年間第 19 主日で、命のパンを受け取る手の形は、手のひらを上にして、授けてもらう・頂くという手の形でないと受け取れませんよ、と話しました。私は聖母被昇天の今日、マリアが神を賛美した言葉の中にもそのことを見つけました。

朗読でマリアは神をたたえて、「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」(1・51-53) と言いました。

神が力を振るうとき、きっとそれは手の甲を上にして力を振るうでしょう。思い上がる者を打ち散らす、権力ある者を引き降ろす、富める者を空腹のまま追い返す、こうした力を振るうときにも、手の甲を上にしてなさるのだと思います。

一方で、身分の低い者を高く上げる、飢えた人を良い物で満たす、こうした働きのために神は手のひらを上にして人々に近づいてくださるのです。先週のミサで説教をしたとき、すでに聖母被昇天の朗読箇所との繋がりを考えていたわけではないのですが、びっくりするほどうまく結び付きました。神様のなさることは、「時」に叶っていると思います。

賛美の歌を唱えたマリアは、小さくされた人の代表です。何よりご自身が、神に対して手のひらを上にして、差し出されたものを受け取る生涯を貫きました。幼子イエスを神殿に奉獻したとき、幼子を抱く手のひらは上を向いていたはずです。

シメオンの預言には、目を背けたくなるような未来も含まれていました。「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人々の心にある思いがあらわにされるためです。」(ルカ 2・35) それでも、マリア様の手は、示されたものをそのまま受け取る手の形を変えなかったのです。

また少年イエスと共に神殿礼拝に出かけ、わが子を見失って心配したときも、すべての出来事を心に納め、思い巡らしました。心に納めるための手の形も、きっと手のひらを上にしていただいでしょう。それは、シメオンの預言が実現し、十字架の上でイエスがお亡くなりになったときも、変わらぬ姿でした。

マリア様は生涯を、神が示されたものをすべて受けとめる、手のひらを上にして頂く、その生涯を貫かれました。神が示されたものをすべて受け取る生き方を貫いたマリア様を、その体も魂も、天の栄光にあげてくださることは、ふさわしいことだと思います。

天に上げられたマリアは、「わたしの生き方に倣いなさい」と、私たちが手を開いて招いています。私たちは子供のようになって、マリアを慕ってここに集まっています。その手のひらはきっと、天に向けて開かれた手のはずです。

出来れば今日一日は、マリアの生涯を賛美するために、マリアの生き方を最高の栄誉で満たしてくださった神様を賛美するために、手を開いて、手を天に向けて差し出して、過ごしたいものです。